

平成 28 年度 全国私立中学高等学校
私立学校専門研修会
イノベーション教育(グローバル・ICT 活用)研究部会
実施報告

***** 研究のねらい *****

「IT 先進国に学ぶ～ICT 活用は教育課題を克服できるか～」

グローバル化時代に求められる ICT 活用は、我が国の学校教育現場にとって長年且つ喫緊の課題である。世界的に見ても遅れが目立つこの問題に対して、我々はどう立ち向かうべきかを考える必要がある。

我が国の学校教育では、これまで情報教育、教科指導における ICT を活用した授業、校務の情報化の 3 つの側面を通して教育活動の質の改善を目指したモデル事業やガイドラインの整備が進められてきた。これらの政策方針をまとめた文部科学省の「教育の情報化ビジョン」では、21 世紀の知識基盤社会やグローバル化、OECD のキーコンピテンシーに触れるとともに、学習指導要領でも確かな学力育成には基礎的な知識・技能の習得、これらを活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力等及び主体的に学習に取り組む態度等を育む必要があるとしている。

しかし、次々と最新の ICT 機器が学校現場に持ち込まれ、熱心に研究が続けられてきたにも拘わらず、関係者によれば教育での ICT 活用は 20 年以上遅滞したままだという。つまり、これらのことは、これまでの取り組みが必ずしも上手くいっていないことを表している。

ICT が学校教育に与えるインパクトの予測や期待は極めて難しく、また、当初の目標通りに進まない事象を見直すことは更に困難と言える。だが、グローバル化の進展で厳しい国際競争に晒されている我が国に悠長に構えている時間はない。我々はどこで道に迷ったのか、何故遅滞しているのか、問題解決に向けて何をすべきか、正面から考え直すことを迫られている。

今回は世界の IT 企業の一大拠点となっているアメリカ・シリコンバレーを訪れ、最新の ICT の現状を把握するとともに、これら ICT をどのように教育に取り入れているのか、Adobe や Google の教育セクション関係者と意見交換を行い現地 ICT 活用先進校の授業等を視察する。

今回の視察が学校現場での問題解決の糸口となり、生徒にとって理想的な ICT 活用が早急に実現され、教育課題の克服へと繋がるのが望まれる。

◆ 会 期 ◆ 平成 28 年 5 月 10 日 (火) ～ 16 日 (月)

◆ 場 所 ◆ アメリカ・シリコンバレー

【宿泊】シェラトン・フィッシャーマンズ・ワーフ (サンフランシスコ)

Sheraton Fisherman's Wharf Hotel

2500 Mason Street, San Francisco, California 94133, United States

Phone:(415)362-5500

<http://www.sheratonatthewharf.com/>

◆ 参加人員 ◆ 30 名 (主催関係者含む)

◆ プログラム概要 ◆

- ① IT 関連企業 (Adobe、Google) の視察及び教育担当チームとのミーティング
- ② ICT 活用先進校 (Palo Alto High School など) の視察及び授業者とのミーティング
- ③ アメリカの最新の教育事情の研究

◆ 日程表 ◆

日次	スケジュール	食事	宿泊地
1日目 5/10 (火)	15:00 成田空港第1ターミナル集合 17:10 成田(東京)発、UA838便 サンフランシスコへ (日付変更線)	夕:機内	
	10:30 サンフランシスコ着、専用バスにて市内視察 12:15 ツインピークス 13:00 昼食【Swiss Louis: フィッシャーマンズ・ワーフ】 15:15 ギラデルスクエア 16:00 ゴールデンゲートブリッジ 17:00 ホテル【シェラトン・フィッシャーマンズ・ワーフ】着 18:30 オリエンテーション(兼夕食会)【ホテル内バンケット(ブッフェ)】	朝:機内 昼:あり 夕:あり	サンフランシスコ
2日目 5/11 (水)	08:00 ホテル発、専用バスにて Palo Alto High School へ 09:30 Palo Alto High School 視察及び授業者とのミーティング 11:30 Palo Alto High School 発、Adobe Systems 本社へ 12:30 昼食【Adobe Café】 13:30 Adobe Systems 本社視察及び教育担当チームとのミーティング ①Adobe 本社側説明、②日本側説明、③意見交換、④社内視察 16:00 Adobe Systems 本社発、ユニオンスクエアへ 17:30 ユニオンスクエア着 18:00 夕食【John's Grill: ユニオンスクエア】 20:00 ホテル着	朝:あり 昼:あり 夕:あり	サンフランシスコ
3日目 5/12 (木)	09:30 ホテル発、専用バスにて Google 本社へ 11:00 Google 本社視察 12:00 昼食【Charlie's Café】 13:00 Google for Education のビジョン 14:00 事例紹介(西海岸の学校で調整中) 15:00 製品部門によるプレゼンテーション 16:00 振り返り 17:00 Google 本社発、エメリーヴィルへ 19:00 夕食【Hong Kong East Ocean: エメリーヴィル】 20:45 トレジャーアイランドにて夜景観賞 21:30 ホテル着	朝:あり 昼:あり 夕:あり	サンフランシスコ
4日目 5/13 (金)	08:00 ホテル発、専用バスにて視察校へ 09:30 Menlo School 視察 12:30 昼食【P.F. Chang's: スタンフォードショッピングセンター】(各自負担) 14:00 スタンフォード大学教育大学院にて講義及び質疑応答 15:30 スタンフォード大学、ブックストア、キャンパスツアー 17:00 スタンフォード大学発、ホテルへ 18:30 ホテル着 夜 夕食(各自)	朝:あり 昼:なし 夕:なし	サンフランシスコ
5日目 5/14 (土)	終日 自由行動 ※オプションツアー(事前申込者のみ) アルカトラス島半日観光(午後・昼食無) 18:00 意見交換会・懇親会【ホテル内バンケット(ブッフェ)】	朝:あり 昼:なし 夕:あり	サンフランシスコ
6日目 5/15 (日)	08:00 ホテル発、専用バスにてサンフランシスコ空港へ 11:20 サンフランシスコ発、UA837便 成田(東京)へ	朝:あり 昼:なし 夕:機内	〈機中泊〉
7日目 5/16 (月)	14:10 成田(東京)着、入国手続後、各自解散	朝:機内 昼:—	

概要

5月10日～16日、アメリカ・シリコンバレーで研修会を開催した。参加者は全国より30名。約1週間にわたる長期間の研修会であったが、アメリカでの先進的な取り組みを肌身で感じることのできる大変充実したものとなった。研修会の主な内容は、先進的取り組みを行っている現地の学校での取り組みの視察、世界を牽引するIT会社の教育部門の取り組みについての説明を受け、社内視察、スタンフォード大学におけるデザイン思考の取り組みと、近年注目を浴びているSTEM教育についての重要性とアメリカでの動向について説明を受けた。また、様々な場で参加者同士が交流を深めた。

初日：オリエンテーション

初日のオリエンテーションでは、吉田晋・当研究所理事長よりの挨拶と平方邦行・イノベーション教育（グローバル・ICT活用）研究専門委員より趣旨説明があった。その後、参加者・関係者がそれぞれ挨拶を行い、親睦を深めた。



吉田晋理事長は今回の研修会に関して、以下のような趣旨で挨拶した。

- ・まず考えなくてはいけないのは、未来にむけて子どもたちにどういう教育をしないといけないかということ。子ども達が学習して、予測不可能な問題を解決できる大人にしていけないといけない。これが、今、教育に与えられた使命だ。
- ・未来の子どもたちに何が必要なのかそれに気がつくのが、今回の研修の目的であり、変化の現状を知るためには元を見ないといけない。
- ・我々は教師としてこれからの変化に対して、どのように準備が必要で、学校は何をすべきなのか。どのような形で新しいテクノロジーや学習体験を、イノベーションを視野に入れて提供すべきか。

・今回の研修が有意義なものとなり、参加者の学校が周囲を牽引するパイロット校となることを願っている。



平方邦行専門委員は以下のように今回の研修の趣旨・背景課題を説明した。

- ・世界の教育改革は20世紀から相当進んでいる。オバマ大統領が全米の教育の統一をした。古いところではイギリスのブレア首相が「教育、教育、そして教育」と言った。世界での教育改革はどんどん進んでいる。一方、日本ではなかなか進んでいかない。
- ・私立学校が先進性・独自性を発揮して先に進まないといけない。これからの予測のつかない社会でどのように子どもを育てるのか、安定的に20年後、30年後の未来が見える時代なら、これまでのような教育をつづけて行けばよかった。しかし、実際はそうではない。

・20世紀に行われてきた教育は与えられた知識の記憶と適応だった、生徒と教師の関係は従順と抑圧の関係。教える側と教わる側のはっきりした人間関係や人間性では次の時代を生きていくことができない。そこから生み出されたものが自己否定感。様々な国と比較して、アンケートをとると日本の高校生は「自分は駄目だ」「将来に不安がある」という感想がでる。欧米・中韓とも違う。そうすると、それは学校で培われたと考えざるをえない。

・高校は本当にアドミッションポリシーをやっているのか、それを生かす入試をやっているのかを考えて行かないといけない。どのようなカリキュラムポリシーを学校は目指して行くのか。出口はどうするのか。進路指導はローカルかグローバルか。考えて行かないといけない。それぞれの学校がモデルをどう示していくのか。もう一度現状を振り返りながら、次に進んでいきたい。

2日目：学校視察（Palo Alto High School）



Palo Alto High Schoolでは、学校が取り組んでいるジャーナリズム教育について主に視察を行った。設備や取り組みについては生徒3名にPalo Alto High Schoolで行われているジャーナリズム教育について施設（Media Arts Center）を見学しながら、説明を受けた。

ジャーナリズム教育のための施設は入口を入ると壁に液晶画面が複数あり、生徒が作成した番組・オンラインニュースを流している。先生の部屋、教

室、収録のための部屋、編集作業室があり、キッチンやエアロバイク等もある。

現在、同校は 2000 名の在校生があり内 700 名がジャーナリズム教育に従事している。7 種の雑誌・新聞・テレビ・ラジオ・オンラインニュースを出版・放送している。企画・取材・デザイン・編集までを行っており。これらを維持するのは寄付やスポンサーからの広告収入で成り立っている。スポンサーや寄付を交渉するのも生徒が担当しており、企業や保護者を回って寄付を募っている。

生徒は最初に共通した授業を受け、雑誌等の作成に従事することになる。授業では本当に必要最小限のことだけをならう、その後は個人が自分で勉強して技術を磨いていくのだと案内役の学生の一人が説明してくれた。

この学校でのジャーナリズム教育の導入は Esther Wojcicki・ジャーナリストによるものであるが、出版・放送の制作については先生が決定的な指示を出しているのではなく、生徒が自主的に制作している。先生はメンターやコーチの立場を取っている。編集長は生徒の立候補制であり、立候補した生徒がプレゼンテーションを行い、複数の立候補者の中から決定する。

制作作業は大変時間のかかるもので、通常の生徒が午後 2 時～3 時には帰宅するところ、毎日夜 9 時頃まで作業に従事している。テストの時やレポートがある時などは、生徒同士が協力して乗り切るのだと説明してくれた。キッチンの使用も生徒の自己責任でしようしている。例え事故があったとしても、それは生徒の自己責任であることも親も理解しているということであった。

作成された雑誌・新聞は内容・デザイン等、本格的で市販されているものと遜色ないように思われた。案内してくれた生徒のうちの一人は自分たちの取材で高校に行けなかった子どもが高校に行けるようになったことがあり、そういった体験を通じてジャーナリズムに力のあることを知ったと語った。

また、学校のパソコンは特に規制がかけられていない。パソコンの使用も全ては自己責任であることが浸透している。施設内では、カードゲームをしている生徒やソファ・クッションに寝転がって話をしている生徒もいて自由な雰囲気みえた。しかし、案内の生徒によると勉強を怠けている生徒は居ない。将来については授業等で勉強する中で、自分で考えて見つけていくのだと説明してくれた。



2 日目：会社見学（Adobe Systems）

Adobe Systems（以下：Adobe）では、2 名の方からアドビの教育への取り組みについて説明を受け、平方邦行専門委員より日本の教育の現状と取り組みについての報告があり、その後、社内視察を行った。



Adobe の 2 名の方からの説明はおおよそ、以下のようなものであった。

・ Adobe は経験を重視している。生徒がどのような経験をつみ自分を成長させてきたかがということである。そのため、Adobe は教育に関しては、生徒がデジタルな経験ができるようにすると共に、学校の管理的な効率性を高めたいと考えている。

・ 創造力が大切だと考えている。学校のカリキュラムでは皆が一斉に同じ物をつくることが未だに多いがそのことに対して疑問を持っている。企業や企業の CEO は創造的（Creative）な人、新しいものを生み出せる人が一番欲しいと思っている、しかし、学校の教育では創造性の育成は学校では考えられていない。

・ 創造性は選択肢の一つではなく、必然だ。保護者は創造性を芸術に関わることだと考えている。しかし、そうではない。書く読むは技術だが、創造性は教育の中で重要であるべきである。

・ 生徒は web に動画を上げたり、SNS に作成物を上げたりしている。生徒は様々なデジタルツールを使っていたがっている。STEM に見られるようなスキルが必要となっている。生徒がどうするのが大事。

・ デジタルはツールにすぎない。新しいものを使うだけでなく、作る側にもなるトランスリテラシーが重要である。Adobe のツールは色んな分野で使われてきた。授業内でプロダクションメイクに用いられるだけではなく、管理側からはマーケティングに使える。成績評価のシステムや、保護者が毎日子ども

成績状況を見るシステムもある。そういった環境を提供し、次世代のデジタル変革の役に立ちたいと考えている。

・教育は生徒を如何にイノベティブにできるか、記憶出来ていることが教育できていることではなく、問題を解決できる能力を持った創造的な人間に育てなくてはならない。生徒の問題解決、批判的思想、創造力を養うことが重要。そのための、マテリアルが必要だと言われている。現在の会社が新人社員に求めていることはテクノロジーに即席に耐えることではなく、テクノロジーにどう考えるか、デジタルツールでコミュニケーションできるか、創造的なことができるか、問題を見つけ、人とは異なる切り口を見つけられるかである。

・学校はテクノロジーを活用して教えると同時に、生徒が自分達で学び、将来を見越して様々なことができるようなスキルを身に付けるようにしていく必要がある。生徒・学生にはチャンスがなくはない、答えの無いところに挑戦していかないと創造性は育たない。

平方邦行・本部会専門委員より、日本の現状と新しい取り組みについての報告。



・日本の典型は教師が答えを知っていて生徒を答えへと誘導する、所謂講義型の授業形態である。しかし、この形態は教師による抑圧と生徒の従順という構造を内蔵している。そのため、生徒は自己肯定感を持ってない状況が生まれている。生徒の内面の不安定さが外に向かえば暴力行動へ、内へ向かえば自己否定的な行動をとる危険性を孕んでいる。

・一方的授業ではなく双方向的授業を行うことによって、抑圧と従順という構造を脱却し、自己肯定感をもった生徒を育てたい。そのためには、授業・テスト・評価が一体となって変わらなくてはならない。現在、双方向の授業を行う学校は増えている。しかし、学校毎の温度差が大きいのも現状である。

・教師はティーチング・ファシリテイト・コーチングの能力を身に付ける必要がある。21世紀型教育は、教師が学習する組織、教師がイノベーションをおこす組織でないと実践出来ない。

・現在、日本の大学ではアドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーの策定を義務づけられているが、高等学校もアドミッションポリシー・カリキュラムポリシー・ディプロマポリシーを作り、それらを具体化していかなくてはならない。

3つの発表の後、社内視察を行った。アドビにはレクリエーションルーム・瞑想室やバスケットボールコート、屋上菜園等が生産性を高めるために、できる限りの設備を整え、出勤時間・勤務地・服装の全てがフレックスであった。生産性向上・新しい物の開発の為に多くのリソースが投入されていた。また、20年前には個室を持って仕事をし、横の部屋の人間にも電子機器を通して声をかけると言うスタイルが一番良い物とされていた、ところが、現在はチームが同一空間にいて、お互いにいつでも話し合えるようにするスタイルにかわってきており、常に社員の協働・相互作用が起きるようにしているとのことであった。

3日目：会社視察（Google）

社内視察の後、Googleの教育に対するビジョンを聞き、VRの教育における可能性の説明と体験、学校でGoogle製品を用いた取り組みの具体的な事例の説明を受けた。



社内視察では、Googleにおいても生産性が高ければどのような働き方をしてもよいと説明があり、社員が生産性を高めるために、プールやビーチバレー場をはじめ様々なレクリエーション施設を社内にかけていた。犬をつれている社員もいた。

Googleからの発表は以下のようなものであった。

・現在のテクノロジーは世界中の人を繋いでいる。インターネットの革命が、情報の民主化が起きている。情報はどこにいても共有できるようになっている。しかし、教育水準の民主化は不十分であり、努力してすすめていかないといけない事柄。教育水準の民主化は進んでいない。教育水準の民主化を人間

中心に進めないといけない。

・教師の根本は変わっていない。しかし、教育の場で教えるスキルは変化している。今までは、教育において基本的な学力を学ぶことが基礎概念であった。これからは、一つのリサーチで答えが分かるものを教えるべきではない。

・世界のグローバル化が進展するにつれて、様々な人との協働 (collaboration) の重要性が増加していく。プロジェクトを立ち上げ機能させるには、学際的な機能が必要になり、それぞれの分野の専門家が必要になる。そこで専門家同士の協働が必要になる。

・AI の急速に進展にともない、過去にはできなかったことが可能になっている。様々な危惧はあるが、AI の重要性はこれからも増していくだろう。人間が創造性とツールを用いて対応していく必要がある。

・情報の民主化に伴い、様々な情報がインターネット上に氾濫している。生徒には批判的な思考が必要である。インターネット上にはどこにいても情報にアクセスできる、これらの情報を用いて何をすれば良いのかがこれからは問題になる。関連性のあるものや重要性のある情報を見つけること、新しいやり方を用いた思考力が必要になっている。

・上記の協働・創造性・批判的な思考がこれからの時代に必要となる。学校では必ず子どもたちがこういったスキルを持つようにする必要がある。

・教育市場は 50 年前とあまり変わっていない。先生がいてクラスに一方向に情報の伝達をすると言う在り方が現在も変わっていない。クラス内をもっとダイナミックに情報が流れるようになる必要がある。生徒たちは自己学習をすると自分で責任を持って学習すると学習効果が高い。先生の役割はメンター、コーチ的な役割になる、教師の役割はより重要になってくる。先生は何でも知っていないといけないのではなく、知らないことをどうナビゲートしていくかというスキルや、一方向ではない授業をするスキルを教師は身に付けて欲しい。

4 日目：学校視察 (Menlo School)



Menlo School では、まず日本語の授業を選択している生徒との交流会があり、学校の先生方から学校の取り組みと ICT を用いた授業の説明の後、3つのグループに分かれて授業視察を行った。グループ毎に見学する授業が異なった。

参加者と生徒との交流は飲み物を片手に楽しそうに話していた。来年度からは日本語の授業はなくなるそうである。日本語を担当している先生によると、日本語が授業からなくなると言うのは日本という国が重要視されていない形の表れであると言っていた。

同校は、テクノロジーと教育学と教科内容の三位一体での教育を行っており、ツールを通して学びを簡単にするだけでなく、何故・何を学ぶのかを生徒が明確に理解して学ぶことができると冒頭に説明があった。また、自分の住む地域だけでなく、グローバルな視野をもつためのプロジェクト教育も行っている。学校には「collaborate」「creativity」などの学校の目標が書かれた旗が見受けられた。常に見える場所に学校の目標を掲げている。

中学校の通常の授業を3班に分かれて見学した。報告者の見学した授業は音楽、理科、日本語の授業で、いずれも10名から15名ほどの少人数であった。音楽では、振り付けのある歌を見学し、理科では風力発電の発電機の羽をラップトップパソコンでデザインし、デザインしたものをラボにある3Dプリンターを使って形にして発電量を比べるという授業、日本語はロの字に生徒が座り、パソコンを使って作成した絵本の日本語での発表の授業をそれぞれ見学した。絵本を作る課題は他の語学の授業も行われているということが全体での説明でもあった。

生徒の発表における積極性は驚嘆すべきものがあり、授業に対して消極的な生徒は一人として見られず、自分に発表の機会が回ってくるまで、人が話している途中であっても決して手を下ろさない姿は日本では見られないものであった。

また、同日、高等学校のメイカーフェストがあり、高校生が学校のラボを使用して制作した作品の展示会があった、ドローンを使った物や多足歩行のロボットからモグラたたき、子どもが遊ぶ家など様々なものが展示されていた。同校のラボは机が1人1脚与えられており、安全や工具の使い方など基礎的なことを習い、そこで何を作ってもいいというもので、分からないことがあれば、聞くという形をとっている。ロボットのラボもあった。



4 日目：スタンフォード大学での STEM とデザイン思考についての講義、d.school 視察

スタンフォード大学ではデザインシンキング・について、木島里江・スタンフォード大学教育学部講師、ヤング吉原真理子・立命館大学客員教授・東京工業大学非常勤講師の両氏より講義を受けた後、同校の d.school の視察をおこなった。



- ・SREM 教育の重要性は三点、国の GDP を支える STEM 関連の職業が日本では 3 割にある。アメリカでの STEM 関連雇用がこれから先も伸びるであろうことが予測されている。また、STEM 関連職種の賃金が高い。

- ・日本では数学における男女格差、男子の方が高い、パーセントイルに見てもトップ 10% の女子と男子を比べると 28 ポイントある。学年で示すと 6 ヶ月の学びの差がある。アメリカではこの格差がほとんどない。理科における格差も男女格差がトップである。世界的にも問題視されている。日本ではギャップが広がっているのか、日本でのアンケートでは、算数が苦手と答えた女子が 62.8%、男子が 46.3% がある。そのうち、算数の成績は良いと答えた女子は少なく、難問を解けると考えている女子も少ない。女子には算数に対する自信やモチベーションが低いのではないかと考えられる。

- ・日本の女子は STEM 分野に大学で入る時点でかなり少なく、OECD 諸国で見ても 5 分の 1、男子も少ない。文系に進む生徒の方が多い。女子の学位は、STEM 分野は 8% ほどしかない。

- ・シリコンバレーは科学・物作りに親しむような教育が行われている。

①メンローはSTEMやラボラトリーがある。高校生がラボを使うが、中学生もラボを使っている。中学生は学外コンペティションにでる生徒で、基本的な事や、安全に使うためにはということを知り、自由に使っている。学校の教育とラボが連携して教育をすすめている。メンローは場をあたえて、各クラスが様々に使っている。学校は場の提供をし、生徒は単位をもらう。

②ガールズミドルスクール、11 歳から 14 歳の女子を中心に実学重視の教育をしているユニークな教育をおこなっている。7 年生のアートとデザインを組み合わせた授業ではチームでプレストをおこない、インタビューをおこない、商品のアイデアをつくり 14 週にわたり学外の専門家のコーチのアドバイスを元に商品を作っていく。そして、作り上げた商品をベンチャーキャピタリスの前で発表できる。学校はツールを学ぶ場をあえている。

③ヌエバは定量的な成績をださない。何をつくっても成績が出ない。失敗してもいいという場をつくる。成績の代わりにモノがでてくる。

- ・アメリカでは、プロジェクトなどの活動が評価される。大学受験・入社試験等の次につながっていく。また、学校の売りにもなる。どこの大学にいくかだけでなく、どんな人間なるのかというのが大切で、モノづくりやイノベーションをさせるような人材づくりを行っている。しかし、STEM が好きでやっているのか、履歴書のためにやっているのかは分からなくなる問題はアメリカでもある。

- ・アフタースクールの時間に STEM に触れる機会が多い。公立の小学校の空き教室でロボット教室が行われている。プログラミング、メカニカルエンジニアリング等、新しい高度な技術を学んでいく。子どもたちが楽しんでおこなっている。様々なコンペティションもある。

- ・デザイン思考とは、物作りをする際に必要なマインドセットとそれ学ぶプロセスを含むもので、物作りに大切なのは使う人の視点であり人間中心の考え方だ。

アイディアをポストイットにだす。それを元に議論する、固定観念にとらわれないアイディアをだし、その場では面白いアイディアこそ良いものとされる。デザイン思考は物作りだけでなく、ビジネスや教育に生かされている。

- ・STEM 教育の中にどうやって、人中心のデザイン思考の考えを取り入れて、子どもの創造性をどう生かしていくかがこれからの課題。



5日目：意見交換会



参加者全員が意見を発せし後、大羽克弘専門委員長より以下のような閉会の挨拶・謝辞があった。

- ・新しいものを生み出す時は情熱がなければならない。
- ・現在、次々と技術革新があつて、教育に使えないかと考へているが、どのようにつかえるかは実際にやってみないとわからない。しかし、やってみないとわからないものには中々お金がかけられない。どこかモデルをやってくれないかと考へるが、公立がやると私立は後追いになる。

スピードをだしてやらないといけない。

- ・今回の研修では様々な方の参加があり、これを機会に横の繋がりが出来ていけばいいと思う。
- ・私立はDNAだと考へている、建学からDNAが綿々となつてつながつている。それは人材、人だ。そして、生徒がその恩恵を被るようにしたい。

アンケート結果

・ICTの活用状況を確認することができた点や、STEM教育の取り組みを見ることができた点は、参考になった。

・どのような能力やスキルを育てる必要があるのか改めて再認識した。少しでも早く具体的に教育活動に活かしていきたい。

・有意義で充実した研修会だった。

・生徒たちが将来、正解のない問題に立ち向かつていくためには、Creativity養成がとても大切であることを実感した。

・研修に参加することによって、自分の考へ、さらには日本全体においても「固い＝柔軟性がない」ということに気づかされ、これが原因で「自主性」が失われてきていることを痛感した。

都道府県別参加者数

No.	都道府県名	人数	No.	都道府県名	人数	No.	都道府県名	人数
1	福島	1	5	愛知	2	9	福岡	1
2	千葉	2	6	京都	1	10	鹿児島	2
3	神奈川	3	7	兵庫	1			
4	東京	16	8	島根	1			
10都府県						計		30

◆講師・指導員（順不同）

吉田 晋	富士見丘中学高等学校	理事長・校長
平方 邦行	工学院大学附属中学高等学校	校長
中川 武夫	蒲田女子高等学校	顧問

◆専門委員・客員研究員・指導員（順不同）

大羽 克弘	千葉英和高等学校	理事長・校長
平方 邦行	工学院大学附属中学高等学校	校長
須藤 勉	東京私学教育研究所	所長
山中 幸平	学校法人山中学園	理事長
川本 芳久	一般財団法人日本私学教育研究所	事務局長代行
山崎 吉朗	一般財団法人日本私学教育研究所	主任研究員